

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The Functional Characteristics of Adverbs of Degree in Comparative Sentences : Using Differences in Scale to Examine the Degree of Differences between Two Objects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川端, 元子, KAWABATA, Motoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002090

比較構文に出現する程度副詞

—スケールの相違という観点から—

川 端 元 子
(名古屋大学大学院)

キーワード

もっと, ずっと, いっそう, 比較基準, スケール

要 旨

比較構文「XはYより〔程度副詞〕P」で用いられる程度副詞は、「YもPである」という前提の必要な「もっと」類と必要ない「ずっと」類に分類されてきた。しかしこの分類は、「もっと」の特殊性やそれぞれの程度修飾の特性、用法的な制限を十分に説明できない。そこで、本稿ではこれらの程度副詞の特性を比較に用いる程度スケールの相違として説明し、程度スケールの特性が以下のように語句の本質的な意味によって規定されていることを明らかにした。

①「ずっと」は〈双方向性スケール〉を用い、基準に対するPかどうかの認定を必要としない。時空間上の位置差を程度差に読み替えて程度修飾する。②「もっと」は基準への認定にとらわれずに比較したい属性Pについて〈一方向性スケール〉を設定する。スケール上のプラス（Pの程度が大きいことを表す）方向に価値をおき、その方向へ向かって基準と異なる状態を提示する。③「いっそう」は成立している状態の増幅や事態の追加を表す。それには基準が成立している必要があり、比較のための〈一方向性スケール〉は基準への認定に拘束されて設定される。

この観点をを用いれば、程度副詞性の疑われる用法も、程度副詞らしさの違いとして説明できる。

1. はじめに——問題の所在

程度副詞「もっと」「いっそう」「ずっと」は、いずれも「XはYより〈程度副詞〉Pだ」という構文で「X（がPであること）」と「Y（がPであること）」について比較して、「X（がPであること）」が「Y（がPであること）」の程度を上回っていることを表す（石神1980, 渡辺1986, Kennedy 2001）。しかし、これらの用法には相違があることが指摘されている。例えば、渡辺1986, 渡辺1987, 奥村1995, 佐野1998の研究は、比較構文「XはYより〈程度副詞〉Pだ」に用いられる程度副詞を、「YもPである」という前提を必要とするかどうかによって「もっと」類と「ずっと」類に分類している。それは佐野1998によれば、次の例の

(1) a : XはYより〈程度副詞〉P。 / b : YはXより〈程度副詞〉not P (¬P)。

においてaが成り立つとき、bが共に成り立つかどうかで判断できるとされている。例えば、

(2) a : 太郎は次郎より〔もっと／ずっと〕背が高い

b : 次郎は太郎より〔もっと／ずっと〕背が低い。

のようなaとbを想定したテストである。その結果から、

(3) 共に成り立つもの…「YもPである」との前提を持つ…「もっと」類

成り立たないもの…「YもPである」との前提を持たない…「ずっと」類

のように分類されている。「もっと」類は「いっそう」「さらに」、「ずっと」類は「はるかに」「断然」「よほど」などである。これらの研究を整理すると次のようになる。

	「XはYよりもっとP」	「XはYよりずっとP」
a 渡辺 1986 b 渡辺 1987	ある程度はPだが、十分にはPでないと話者が認めるYを媒体とすることで、XがPである程度がYのそれを凌駕する度合いが大きい。(a)	Xの方がP、XはPとの判断を先行させた表現。「ずっと」の場合、YPA性が甚だ低くてゼロに近いが、「よほど」のように非Pに転落することはない。(b)
奥村 1995	「XがPであること」が「YがPであること」を大きく超えている。	「XがPであること」を表す表現であり、基準のYとXを比較したときに二つの程度差が大きい。
佐野 1998	XとYの「客観的な関係」を表す。	XとYの程度差が大きいことを話者の「主観的な評価」として述べる。

しかしながら、従来の説明では未解決の問題もある。

第一に、「YもPである」との前提の必要性だけで「もっと」「ずっと」の相違を説明するのは、実はむずかしい。すでに渡辺1986、奥村1995、佐野1998などが自ら指摘するように、「もっと」の「YもPである」という前提を必要としない用法（以後「否定的用法」（佐野1998）を用いる）が存在するからである¹。例えば、

(4) 為替市場不安定化の真因はもっとほかのところにあるようです。(中日)

の例では「YもPである」という前提を必要とするかどうかの議論自体が成り立たない。したがって、このような否定的用法が生じるメカニズムが詳しく考察されねばならないだろう。

第二に、これまでの分類では同タイプとされてきた「もっと」と「いっそう」は、程度の増大を表す点では共通するものの、被修飾の語句や、文末の形式に関する制約などの点において相違点が少なくない。佐野1998では、「もっと」の「否定的用法」が「いっそう」に見られないことに注意が払われているが、なぜ「もっと」にのみこの用法が見られるかについては、十分に明らかではない。しかも「否定的用法」かどうかは

(5) a：(これからは今より) もっと勉強せよ。

b：(遊んでばかりいないで) もっと勉強せよ。(渡辺1986)

のように、基準となる現状への話し手の捉え方次第であり、かたちの上からでは判断できないとの指摘も見える(渡辺1986、佐野1998)。したがって、「もっと」と「いっそう」を区別するための装置にはなっても、「もっと」の機能を「いっそう」との違いから説明するためにはさらなる検討が必要である。つまり、「否定的用法」を持つ「もっと」の特殊性が従来の研究では十分説明されていないのである。

第三に、そもそも「XはYより[程度副詞]P」で用いられる「もっと」「ずっと」「いっそう」

などは、単に二つの事態のあり方を比較して「Pに関してはXがYより程度が大きい（ $X > Y$ ）」であることを示すものではない。例えば、

(6) (次郎180cmに対して太郎が181cmと知って) ??太郎は次郎よりももっと背が高いよ。

では、180cmの次郎が高いという前提があっても、否定的用法であるとしても、「もっと」が不自然になる。したがって、その表現の目指すところは、基準となる状態を確定したうえでそれとは何らかのかたちで異なる別の状態を意識し、そのありようを表示することにあると考えられる。したがって、比較される二者の関係の他に何を表しているのかを探る観点が必要になる。

第四に、従来の研究は「程度性を持った二つの状態XとYが、結果的にどう関係を持ってスケール上に位置しているか」を表す程度副詞の用例を中心に相違点を探ってきた。そのため、時間を表す「ずっと」や量的な程度を表す「もっと」など、すなわち

(7) 僕らの生まれてくるもっとも前にはもう、アポロ計画はスタートしていたんだろ。(アポロ)²

(8) 僕らの生まれてくるずっと前にはもう、アポロ11号は月に行ったっていうのに。(アポロ)

(9) 何人かのスター選手が人気をいっそう押し上げている。(中日)

といった用法や程度副詞から逸脱した用法を取り込んだ説明が除外されてきた。こういった例では何を前提とするかの把握が確かに困難である。ただし、「より」で示される比較対象があって状態性の語句を修飾していると程度副詞らしさの度合いが上がる。このような用法を通してこれらの副詞の程度修飾の性質が捉えられるべきである。

第五に、程度副詞が重複して使われる場合にも注意をする必要がある³。例えば、

(10) 大蔵省は「景気は引き続き停滞しており、さらに一層厳しさを増している」と分析している。(毎日)

(11) 彼女が言うように、地震よりももっとずっとおそろしいものなのだ。(中日)

(12) これでは景気の先行きも不安だ、さらにもっと対策を講じなければいけないのか、と不安になっているだろう。(中日)

のような例がそれにあたる。一方、重複できない例もある。

(13) *景気は引き続き停滞しており、[もっといっそう / ずっといっそう / いっそもっと] 厳しさを増している。

これらの例を見れば、程度副詞としての機能の違いは、いわば程度副詞の程度副詞らしさの違いとして整理し直さなければならないと言える。

以上の点から本稿では、程度副詞ではないとされたり、あるいは曖昧であるとされる用法を含めたその語句の多様な用法をも包括的に考察する。その際、スケールのあり方に注意して考察する。そうすることにより、これまで「もっと」「ずっと」の二つに大別されてきたものを、その程度修飾の機能や特性から「ずっと / よほど」「もっと」「いっそう / さらに」の3タイプ5種類に整理できることを示す。

2. 「YもPである」という前提の有無はスケールの違いとして説明できる

まずは前提の有無を程度スケールの違いとして説明する。程度スケールとは次のようなものを想定する。程度副詞が修飾する相対的な状態性PはP性を表す無数の程度段階を有する。これがPが程度性を持つということであり、この段階が極小から極大へとアナログ的に並ぶ直線をイメージとして描いたものを程度スケール（以後、スケール）とする。そのうち、スケール上を一方へ進めばPの程度が進み、もう一方へ向かえば-Pの程度が進むようなスケールを〈双方向性スケール〉として「 $-P \leftrightarrow P$ 」で表す。Pと-Pは対極反意語（polar antonym/polar opposition）であり、Pの極小値（Min. P）から極大値（Max. P）へ向かうスケール「Min. P → Max. P」とPの極小値が-Pの極大値（Max. -P）を表すとみなして設定できる「Max. -P ← Min. -P」という対称的な二本の〈一方性スケール〉が合体したものとす⁴。本稿では「もっと」「いっそう」「ずっと」の相違点を、これらのどのスケールを用いて程度性を表すかという観点から明らかにするものである。（なお、本稿では「前提」を「話し手やそれ以外が比較基準Yに与えた価値づけや評価（認定）」とし、その認定を受け入れるかどうかを「取り扱い方」とした。）

2.1. 「ずっと」は双方向性のスケールを用いる

程度副詞を用いない比較の基本的な構文「XはYよりP」（「よりφ」）文は、「Pに関していえば $X > Y$ 」を表し、「YはXより not P（-P）」「Pに関していえば、YはXに及ばない」を含意する。したがって、冒頭の（1）（2）（3）でみたように、

(14) a：太郎は次郎より [φ/ずっと] 背が高い。

b：次郎は太郎より [φ/ずっと] 背が低い。

の(14a)が成り立つとき(14b)も成り立つため、「XはYよりずっとP」（「よりずっと」）文はこの構文と共通する性質をもつ。(14a)(14b)が共に成り立つことは、太郎(X)と次郎(Y)の比較において、相対的な程度の大小（[背が高い(P) / 背が低い(-P)]）のはどちらかが問題とされていることを示す。すなわちこの構文では(15a)の質問に対して

(15) a：太郎と次郎はどちらが背が高いですか。

b：太郎のほうが [φ/ずっと] 背が高いです。

c：次郎のほうが [φ/ずっと] 背が低いです。

のように(15b)(15c)のどちらで答えても、表す内容自体には変わりがない。したがって、この比較で用いられているスケールは〈双方向性スケール〉の「 $-P \leftrightarrow P$ 」である。そのスケール上の両端に位置するPと-Pは互いに相対的な概念であり、(14a)(14b)は同じスケールを用いてXYのどちらの立場から述べるかの相違である。スケールを下図に示す。

(16) 双方向性のスケール

Min. P (Max. -P) (14b) $-P = Y \leftarrow \leftarrow \leftarrow \leftarrow \leftarrow X$ Max. P (Min. -P)

$-P \text{-----} + \text{-----} + \text{-----} \rightarrow P$

(14a) $Y \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow X = P$

このスケールでは、スケール上に最初に位置づける比較基準はそれのみでPであるか-Pなのか

が問題とならない。「よりずっと」文や「より ϕ 」文が「YもPである」との前提を必要としないことは、このようにYが絶対的にPであるかどうかを問題にしないということと考えてよい。

2.2. 「もっと」は一方方向性のスケールを用いる

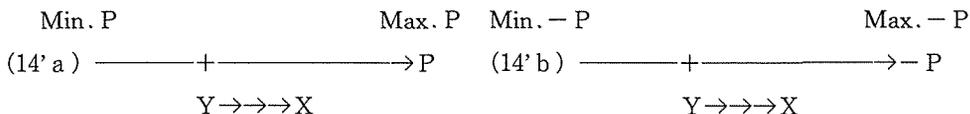
「ずっと」に対し、「もっと」は(14'a)が成り立つとき、(14'b)が共には成り立たない。

(14') a : 太郎は次郎よりもっと背が高い。

b : 次郎は太郎よりもっと背が低い。

その理由は(14'a)(14'b)では前提が相反するからだとされてきた(佐野1998)。このことは、実度性をはかるスケールが異なっていることを意味する。(14'a)(14'b)はそれぞれ「P」「-P」に関する別々のスケールを用いて程度を比較した結果であり、Pと-Pは互いに独立してスケールをなす属性である。結果からいうと「よりずっと」文も「XはYよりもっとP」「(よりもっと)」文も「Pに関していえば $X > Y$ 」を表すが、(14'a)は絶対的な基準においてXもYもPである場合の $X > Y$ を、(14'b)は絶対的な基準においてXYともに-Pである場合の $Y > X$ を表すものである。これが、「XもYもPである」という前提に立った場合の比較の表す意味である。比較のためのスケールを図示すると次のようになる。

(17) 一方方向性のスケール



このスケールは「よりずっと」文が用いるような〈双方向性スケール〉に対し、一方方向に程度が増大することを表す〈一方方向性スケール〉である。

以上のことから、「よりもっと」文が「YもPである」との前提を必要とし、「よりずっと」文が必要としないことは、次のように整理できる。

(18) 「XはYよりもっとP」…絶対的な基準においてXYともにPであり、
相対的な関係において $X > Y$ である。

「XはYよりずっとP」…相対的な関係において $X > Y$ である。

さらにスケールの相違という観点から整理すると以下ようになる。

(19) 「ずっと」……〈双方向性スケール〉を用いて比較を行う。

「もっと」……〈一方方向性スケール〉を用いて比較を行う。

3. スケール変更が可能な「もっと」と変更不可能な「いっそう」

「いっそう」は「もっと」と同じく、(14''a)が成り立つ場合に、(14''b)が成り立たない。

(14'') a : 太郎は次郎よりいっそう背が高い。

b : 次郎は太郎よりいっそう背が低い。

また、次のように(15'a)の答えにならない(佐野1998)。

(15') a : 太郎と次郎はどちらが背が高いですか。

b : 太郎のほうが [ずっと/?? もっと/?? いっそう] 背が高いです⁵。

c : 次郎のほうが [ずっと/?? もっと/?? いっそう] 背が低いです。

さらに、次のように -P を前提とした発話では許容できない。

(20) 最初が難しかったので、二問目は [ずっと/*もっと/*いっそう] やさしく感じられます。以上の観点から「もっと」「いっそう」は同じグループとされる。次にその相違点を見ておこう。

3.1. 一方向性スケールの下位類の性質

同じ一方向性のスケールを用いて比較を行う「もっと」と「いっそう」のうち、「もっと」が「Y も P である」との前提を必要としない場合があるのはなぜだろうか。

例えば浜辺でスイカ割りをしている場面で、目隠ししてスイカの位置に手探り状態で進む「オニ」にギャラリーが口々にアドバイスをしようすを想像してみる。すると、

(21) a : 「どっち向いてるんだ。スイカは [もっと/*いっそう] 右, 右。」

b : 「いや, [もっと/*いっそう] 左だよ。」

c : 「そうそう, [もっと/*いっそう] 前。」

のように同じ位置・向きにあるオニの状態を基準として、 $P_1 \sim P_n$ (「右」「左」「前」) の異なる状態の程度について同時に「もっと」を用いて表現できる。このとき比較基準 Y は同じ状態 (位置) であるため、その発話が「Y も P である」との前提を持った発話か、いわゆる「否定的用法」であるのかは、オニの位置を話し手がどう認定して取り扱っているかを知ることによってしか判断できない。すなわち、「Y も P である」との前提の有無は、話し手の基準に対する捉え方という主観的なものに依存していることがわかる。さらに、

(22) a : 彼は170cmぐらいですか。

b : いえ, [もっと/*いっそう] 高いです。

のような数値を基準にして比較する場合に「いっそう」は通常用いられない (佐野1998)。「いっそう」が程度の増大を提示して自然な発話とするためには、話し手は基準となる数値の評価や認定 (高い) を先に表示しなければならない。しかし、「もっと」は発話の時点で話し手が「Y (提示された背の高さ) が170cm」であることに対して、「高い/結構低い」等のような評価や認定をしていても用いることができる。つまり、基準への認定や評価が次の

(23) もっと高く飛ばないといけないのに低すぎた。(毎日)

のように程度の増大を提示する方向と必ずしも一致しなくてもよいのである。さらに、大島1998 が例として示す (24) の比較基準である現状を具体的に文中に示した (24') は、

(24) 父は (以前は痩せていなくて) もっと太っていた。(大島1998)

(24') 父は、今は痩せているが、以前はもっと太っていた。(大島1998の説明を基に筆者改変) のように「Y も P である (今は痩せている)」という前提を持ちながら、-P 方向 (太っている) にスケールを設定しようとするものとなる。これも基準値の認定に関係なく、スケールが設定されていることを示している。

3.2. 認定したことと比較したいこと（比較のスケールの向き）の関係

このように、「もっと」が「YもPである」という前提を持った発話かどうかを決めるのは、「前提となる基準への認定と、どのような程度についてはかるのかといったスケールの組み合わせ」であることがわかった。したがって、基準Yへの認定 P_1 をそのまま基準の値とし、 P_1 に関する程度の大小を問うスケールを設定すれば「Yも P_1 である」との前提をもつ場合である。逆に、基準への認定Pに関わらずそのYの値を別の $-P_1$ や P_2 などのスケールに乗せかえて⁶Xの程度の大きさを表そうとするのが、前提の必要ない「否定的用法」となる。そう考えると、渡辺1986が指摘するような、同じ基準に対してどう捉えるかが異なれば用法が異なるため捉え方を明示しなくてはその用法を特定できないとの指摘（前出例文（5））も解決される。先の（21）では発話者ごとに基準の認定が異なり、比較のために設定したスケールの向きもその組み合わせも異なる。つまり、視点の一貫性という拘束から解放されて別の観点からの検討を許しているのである。「いっそう」にはこのような性質がなく、

（24*）*父は、今は痩せているが、以前はいっそう太っていた。

が不自然であるように、基準への評価・認定に使われたスケールを変更することができない。すなわち、常に発話を行う前の比較基準への認定にスケールの設定自体が拘束される。

これより「もっと」「いっそう」の前提とスケールの関係は次のようにまとめることができる。

（25）「もっと」…「YがPである」との認定に関わらず、比較して程度をはかるためのスケールを新たに設定することができる。

「いっそう」…「YがPである」との認定に則り、絶対的な基準においてXYともにPであるというスケールをそのまま用いる。

これに従えば、「もっと」の「YもPである」という前提を必要としない「否定的用法」も、絶対的な基準においてXYともにPである一方向性のスケールを用いていることがわかる。

3.3. スケール設定に関する相違点

以上をもとに、比較構文に用いられ、XとYの相対的な関係を規定する程度副詞をスケールのあり方から分類しておく。

まず、双方向性のスケールを用いるタイプかどうかを次の例文での許容度ではかる。

（26）a：太郎と次郎ではどちらが背が高いですか。

b：太郎のほうが〔程度副詞〕背が高いです。

（26）において自然なものは、XYの値に関わらずXYの相対的な関係を表すものであり、「ずっと」と同タイプと言える。

さらに、比較基準への認定に拘束されたスケール設定をするタイプかどうかを

（27）父は、今は痩せているが、以前は〔程度副詞〕太っていた。

の例文で検討する。この文脈で不自然なものは「いっそう」と同タイプと言える。結果は以下のようなになる。（表中の「 ϕ 」は程度副詞を用いない場合）

	ズット	ハルカニ	断然	ヨほど	φ	モット	モウ	モウ チョット	スコシ	イツソウ	サラニ	マスマス	イチダ ト	ヒシオ	ナオサラ	イヨイ	
(26)	○	○	○	○	○	×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×
(27)	○	○	○	○	○	○	○	○		×	×	×	×	×	×	×	×

考察の結果より、程度限定に用いるスケールの性質を次のようにまとめることができる。

(28) A：双方向性のスケールを用いるタイプ…「ずっと／はるかに／断然／よほど」

——基準に対するPかどうかの認定を必要としない。

B：一方向性のスケールを用いるタイプ

…①「もっと／もう少し／もうちょっと」

——基準に対する認定に拘束されずにスケールを設定する。

…②「いっそう／さらに／ますます／一段と／ひとしお／なおさら／いよいよ」

——スケールの設定が、認定した基準の価値に拘束される。

次に、このような意味の違いを導くそれぞれのグループの基本的な意味について考える。

4. 否定的用法の生じるメカニズム——「もっと」の包括的説明

「もっと」「ずっと」「いっそう」などの用例を見ても、モデル構文として設定した「XはYより〔程度副詞〕P」のかたちが出現することは決して多くない。実際に「もっと」の採取した用例をみると、奥村1995が指摘する「もっとQ（Q：動作）」を表して文末が「義務・命令」「希望・意志」「推量」になっている構文の例が、実に87%を占める⁷。ただし、これらを「否定的用法」にそのまま適応してよいかどうかは話し手の基準への認定を確認しなければ厳密には確定することができない。そこで、「否定的用法」に見える用法が生じるメカニズムを探ることにより、「もっと」の本質的な意味を探る。

4.1. スケール上で基準からプラス方向への移動を指向する「もっと」

次の例を見ると「もっと」は自然だが、「いっそう」は量の増加に使いにくい（丹保1975，森山1985）。

(29) 「あなたたちはいくつ年が離れているの。」「5つ。」「へえ、[もっと/*いっそう] 離れているように見えるね。」

(30) (隣のグラスに注がれたビールの量を見て) 僕は [もっと/*いっそう] 飲んだ。

上の例によれば、絶対的な基準においてはXYともにPである状態（「年が離れている」「ビールがグラスに入っている」）を前提として持ちつつ、絶対量の増減を表したスケール（以後、量スケール）が設定される。このとき基準となる年の差が1つでも10でも、また、グラスのビールの量に関係なく、常に「もっと」は使える。つまり、比較基準Y自体に程度性がなくとも、量スケールが設定できれば、物理的な量の多少に関わらず量の大きい状態や基準以上の状態を目指すことができる。比較基準の程度について言及する必要はなく、話し手自身が求めている程度が比較基

準となるものより大きいということが主な伝達情報となっている。ただし、

(31) *今162cmだから、もっと8cmのびてほしい。

のように具体的数値を修飾しないことから、「もっと」は量スケール上での移動の大きさ（量の増加の値）を問題とせず、基準と異なる状態になることが意味の核心であることがわかる。したがって、「もっと」が重複して用いられる

(32) 「もっともっと速く」は、リニアモーターカー開発の大きな理由の一つだ。（日経）
の例ではスケール上をプラス方向へ移動する指示の強調と考えることができる。

4.2. スケール上のプラス方向に価値をおく「もっと」

このようなスケールのプラス（相対的に程度が大きいことを表す）方向を常に指向する「もっと」の性質は、スケール上のプラス方向にあることを相対的に優位なものと価値づける心理を生じる。例えば先行研究で「否定的用法」とされている次の例を見てみよう。この例は比較すべき状態性を表す語句も比較基準の状態も明示されていない。

(33) 為替市場不安定化の真因はもっとほかのところにあるようです。（中日）

(34) ドラマの本筋はもっと別の所がありました。（産経）

これらの例で「もっと」が修飾しているのは見かけ上「ほかの」「別の」であり、それらには相対的な状態性はないため、「基準と異なる状態」ということのみが情報として提示されている。これが「否定的用法」の根拠だが、その異なった状態というのは単に異なればよいのではなく、

(35) それとは異なるもっとほかの（[通貨暴落／資産価値の減少／インフレの驚異的進行]と
いった）ところにある…

のように基準となる事態よりも文脈に合致するという意味で適当な事態（または状態）が想定できる。話し手側にある期待と合致するものといってもよい。基準として具体的なものが想定されなくても、少なくとも当該のものや現状でないことは明示されている。つまり、「もっと [ほかの／別の／違った] X」が表す事態は、適当性をはかるスケールを用いてそのスケール上を程度の大きい（適当さの大きい）方へと向かって基準と異なる事態である。

先にも述べたように、「もっと」グループは基準からスケール上のプラス方向への移動を表すものである。このとき、スケール上のプラス方向が文脈上求められるあり方として価値づけられているのである。したがって、基準となる現状や特定の対象を離れてスケール上をプラス方向に移動することが、より適切なものや価値観に合致するものを求めてそれを提示する心的態度を示していると考えられる⁸。

4.3. 「もっと」が表す話し手の心のあり方

このような比較基準と別のあり方や事態を提示することは基準と異なること（状態）を強く求めるものであるために、結果として基準に対する不満や否定的に見積もる心理を内在する。先の(33)(34)が「否定的用法」として説明されるのもこれが理由である。他にも「もっと」には

(36) そうですね。もっと、なんというか、うまく言えませんが…、あの人にはあの人の、この

人にはこの人の生き方があるっていうか、そんな社会ないんでしょうかねえ。

(37) もっとと何とかなるはずだ。

のような後続の内容全体にかかって話し手の心のあり方を強調しているような例がある。これらが一方で望ましいあり方を模索する上昇指向であり、同時に現状への不満の表明であるのも、現状と異なることに価値を置く心のあり方が反映したものと言える⁹。

なお、このことは、儀礼的な挨拶や励ましなどを行う場面における次のような発話において、「もっと」と「いっそう」の違いとなって表れる。すなわち

(38) これから [もっと/いっそう] ごひいきにお願いもうしあげます。

(39) 社長がお見えになったら [もっと/いっそう] 元気をお願いします。

の例において「もっと」では現状を批判するようなニュアンスが伝わり、「いっそう」の方が聞き手の現状を肯定する感じがするといった違いである。したがって、命令・依頼文で使いにくい「いっそう」が許容可能になる文脈とは意図的に現状肯定を含意する文脈である。そしてそれは、「いっそう」が「YがPである」という認定に拘束されてスケールが設定されることに起因する。

さらに、先にも述べたように「YもPである」との前提の有無に関係なく文意が不自然になる場合のあることにも注意が必要である。それは、

(6) (次郎が180cmに対して太郎が181cmと知って) ?? 太郎は次郎よりもっと背が高いよ。

がなぜ不自然なのかという点である。「次郎も背が高い」という前提があっても、実際には「太郎の身長が次郎を大きく超えている」状態を想定する方が自然であり(渡辺1986, 奥村1995)、逆に、180cmを否定的に読んでも181cmを「もっと高い」とすることが不自然に感じられるため、「否定的用法」でも説明できない。この理由は

(40) (ノミのハルコが1cm飛んだのに対しノミのハナコが2cm飛んだのを見て) ハナコはハルコよりもっと高く飛んだよ。

のような場合に1cm差の不自然さが薄れるように¹⁰物理的な大きさが問題なのではない。「程度が違う」と意識されることが重要である。比較対象間に客観的な程度差があっても、二者の程度が同等と認識されれば「もっと」では不自然になるのである。(6)が用法的には適格性をもちながら不自然に感じられるのも、「もっと」が「ずっと」のように程度差を問題とするわけではないのにXの程度が基準Yを大きく超えていることを自然だとされるのも、このためである。「もっと」が有する基準と異なる状態を表そうとする機能が、基準の程度を十分なものとして容認しない心理を生み出しているのである。したがって、基準の程度にかかわらず「否定的用法」の読みを内在することになる。

「もっと」の有する基準への否定的な捉え方は、比較する二者が程度の異なる状態であると認識された後に話し手が求める価値観に合致する一方が支持されるプロセスを反映している。

5. 基準のあり方を増幅させる「いっそう」グループ

「もっと」に対して「いっそう」は次のように数値をそれへの評価なしに比較基準とできない。

(41) *花ちゃんは130cmだが、春ちゃんは花ちゃんよりいっそう高い。

また、少量しかないものの増加を表しにくい。さらに、次の動作を修飾する命令・依頼文では、
(42) ?? いっそう 走れ。cf. いっそう 速く 走れ
「速く」を加えて「現状が速い」ことが認定されれば条件付きで自然に感じられる。このように、「いっそう」が基準の価値に設定スケールが拘束される理由を次にみておく。

5.1. 進行性の状態を増幅させる

「いっそう」「ますます」「一段と」「なおさら」「いよいよ」は

(43) どうしてダンスなのか理解できなかった。…そして今日のあなたを見て、ますます分からなくなった。(Shall we)

(44) 日本社会はこの先、独居、高齢化、家族機能の低下がいっそう進みそうだ。(中日)
のような例を含め、被修飾語句に「～なる」「～てくる」「～が進む」などをともなって状態の累加、進展、いわば状態性の増幅を表す場合が多い。したがって被修飾の語句は状態性を持つものであり、動作性の語句も「～ている」を伴うことが多い。ただし、状態の増幅であるためには基準点の状態が成立している必要がある。例えば

(45) a : 何人かのスター選手が人気をいっそう押し上げている。(中日)

b : 何人かのスター選手がひと頃より人気をいっそう押し上げている。

のような場合、「押し上げる」には人気がすでにある状態が必要である。したがって(45b)の「ひと頃」がまるっきり人気がない状態であれば、「押し上げる」ことができないので文意自体が成り立たない。そもそも数値や動作には認定すべき状態性が備わっていないため、その認定をあらかじめ示す必要がある。その際、少量は「底上げ」はできても「増幅する」のは難しい。

また、これらの副詞は「上」「右」「南」などの空間の位置関係を表す名詞を修飾しにくい。

(46) 駒ヶ岳は右(南)に見えます。槍は[*いっそう/*ますます/*一段と/*なおさら/*いよいよ/さらに] 右(南)です。

その理由は、これらの属性が厳密には相対的な状態ではなく相対的な位置関係であることに起因する。相対的な位置関係は常に基準を0値として設定される。基準が比較される二者以外であってもいったん設定された関係は変わらないため、「いっそう」で増幅のしようがないのである。

5.2. 追加・更新可能な「さらに」

(46) でも見たように、このグループで若干ふるまいを異にするのが「さらに」である。「さらに」は、「もっと」と同じく「他の/別の/違った」などを修飾すると見える場合がある。

(47) 為替市場不安定化の真因はさらにほかのところにあるようです。

(48) さらに違った角度から考えてみる必要がある。

「もっと」ならば提示されているあり方は適当でないとして排除する意味にとれるが、「さらに」の場合はそれも一つのあり方であり、それ以外にも適当なあり方があること(追加)と受けとれる。この違いは、「さらに」が原則として被修飾語に制約がなく、具体的数値の修飾や状態性を持たない名詞の修飾をすることができることに表れている。

(49) キリンが参入する今年は「さらに4割のびる」との見方もあり、激しいシェア争いが予想される。(毎日)

(50) このほかにも、資産公開でこの取引や利益を秘匿する操作をしたと見られる道義上の責任、さらに所得税法違反の疑いが残る。(中日)

これが追加や添加の機能とされるものであるが、文や話題の追加をも表示することができる。ただし、「さらに」の追加や添加はあくまで成立して認定されたものに対して行われるものであり、この点が「もっと」とは明らかに異なり、「いっそう」との類似性を見てとれる。なお、冒頭の例でもみたように「さらにもっと」「さらにいっそう」と重ねて用いられることがある点には注意が必要である。程度副詞よりも一つ外側の階層で用いられることがより程度の高い状態の叙述の追加を行うという意味になりやすく、程度副詞でないと判断されることになると考えられる。

このような、成立した状態の増幅・認定された状態への追加がこのグループの意味の基本をなしている。したがって、程度修飾のときには、被修飾語は状態性の語句に限られる。程度が大きい状態は基準となる状態が増幅されている状態を表し、程度性の進行は状態の累加とみなせるものである。そのため、進行的な状態の場合は、具体的に比較する二つの事態が明示されないと程度副詞かどうかの判断が難しくなる。

6. 程度差を実感的に表示する「ずっと」グループ

「ずっと」は量的程度を表さない(森山1985)。また、動作を修飾する命令・依頼文では動作を継続する意味にとれなければ不自然になる。前提がなくても状態の変化・転換は修飾できない。

(51) *今日はずっと食べた。(ずっとたくさん食べた。)

(52) ?? ずっと走れ/*仕上げろ。

(53) *今は晴れているが、午後にはずっと強く雨が降るだろう。

その理由を「ずっと」の表す程度差が値ではないことから説明する。

6.1. 一定期間の継続や一定距離の移動によって生じた位置差

程度修飾でないとされる「ずっと」には

(54) さあさ、こっちへずっとお寄りなさい。

(55) 一人の老いた母は、式の間、ずっとうつむいたままだった。(天声人語)

(56) ふもとはずっと御坊料理とかって言って、とうふ料理を出す宿ばっかりで、ぼくも今夜食った。(キッチン)

のような用法がある。これら以外にも「～以来」「～から」とともに、あるいは「～ている」「ある」「～続ける」のような存在や継続を表す語句とともに用いられることが多い。これらは起点が明示されているか否かに関わらず、時間軸や空間において一定期間の継続や一定距離の移動の軌跡を表示する。また、「ずっと」は

(57) ずっと南の鹿児島県の上甕島でも、直径28メートルのプロペラが毎日、125世帯相当の電気を起こしている。(天声人語)

のような基準点が特定されなくても、視線の移動をとおして到達点を「南 (P)」の度合いではかったときの位置差を程度差に読み替える操作が行われる。その結果、次の

(58) a : そして木村はずっと静かな調子で言った。 (孤高の人)

b : そして木村はさっきよりずっと静かな調子で言った。

のように基準が明示されて比較対象の資格を得ると、比較対象間の程度差を関係づける機能を明確に持つようになる。

これに対して「ひととき」「断然」「はるかに」などは、

(59) 優勝争いは2敗の武蔵丸が10人の4敗組に2差をつけるひととき有利な展開となった。 (毎日)

(60) 先進十二カ国の雇用政策のランクづけでは、断然トップの優等生なんです。(中日)

(61) その「協調会社」が業界の意見をまとめて政官界に働きかけるシステムは、他の業界よりはるかにうまく機能してきたといわれる。(産経)

のように、集団の中における「有利さ」「トップ」「うまく機能する」といった評価 (P) に関する突出性を、すなわち、選択肢の他候補からの突出性を画然と表示する。次の

(62) 「よし」と、トムが急いで口をはさんだ「ぼくは断然、ニューヨークに行くぞ。」(華麗なるギャツビー)

も本質は同じといえ、これらも突出している対象とそうでないものの距離感を実感的にたどり、Pスケール上の対象間の位置差として表示することによって、程度差として読み替えている。ただし、継続や持続には連続性が必要であり、位置差も突出性も同質的なものではかられるのが原則である。したがって、(53) のような「雨が降る」0値から何らかの値が発生することや

(63) ドラマの核心は#ずっと他のところにありました。(# 「長い間」といった別の意味になる)

のような基準との質的な隔たりを表すことができない。

このグループで異質な面を持つのが「よほど」である。「ました」を修飾する点では「ずっと」と同じだが、「違う」を修飾した次のような例もあり、「ずっと」と比べ被修飾語に制約がない。

(64) よほどお子さんの行動がほかの子供と違っていることからでたものと思います。(産経) スケールを設定できれば空間や時間軸にとらわれないうに、比較の対象となるものが、「常識的水準それ自体とでも言うべき、抽象的で一般的なものでありうる」(渡辺1987) 場合が多い¹¹。そして、それとの間の程度差の大きいものを想定して現状との較差を表示し、常識の逸脱をも意識した程度を示して一種の強調表現として機能していると言える。

6.2. 位置差は量や値に読み替えられない

このように「ずっと」グループの基本的な意味は、時間的あるいは空間的に広がりのある事態についてその広がりを持続的にたどっていった、その位置差をイメージとして実感することであった。そして二つの事態の位置差を特定の属性に関する程度差として読み替えた場合に程度修飾となりうる。その分実質的な概念性を持ちやすく、実質的な概念性を持たないことが特徴とされる

程度副詞(工藤1983)としての適格性の判断が揺れることになると考えられる。「もっと」に修飾され階層の内側で用いられる「ずっと」はより情態副詞的になっていると考えてよからう¹²。

ちなみに、「よほど」や「ずっと」が、一見、量を表していると見える

(65) 今夜は俺のほうがお前より [ずっと／よほど] 金がある。

の場合も金額の多さという値ではなく、あくまで持っている金額の差が大きいことを表しているにすぎない。また、「ずっと」のグループを程度修飾として命令・依頼文に用いるのならば、

(66) 今日は昨日よりずっと速く [走れ／仕上げろ]。

のように、どのような状態についてXY間に程度差をつけるのが明示されねばならない。「ずっと」グループが表すのは、どれだけ差があるか(値)ではなく程度差があること自体である。

7. 各グループの基本的意味——まとめ

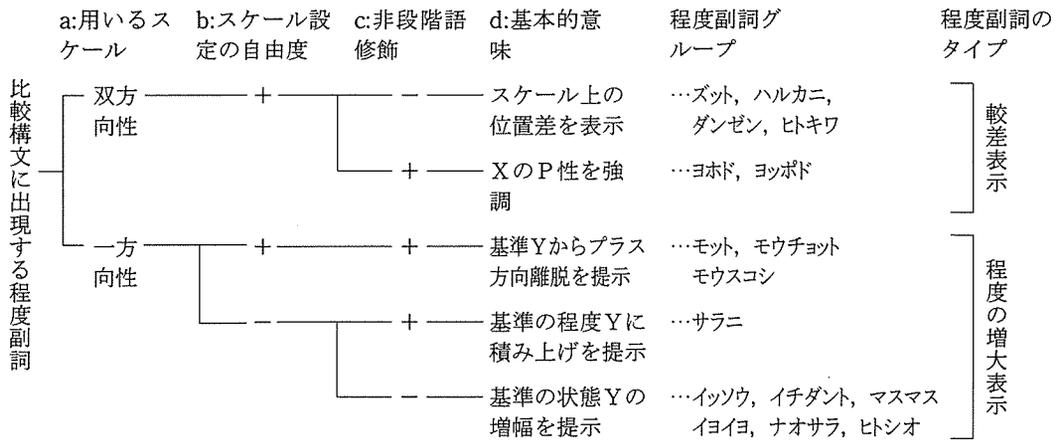
以上から、「もっと」「いっそう」「ずっと」とそのグループの基本的な意味を、各節でとりあげた用例に基づき、被修飾語と基準に取る対象から整理しておく。表中の「動作性動詞の修飾」は、量的程度を読みとつての修飾が可能か、「他」「別」などの修飾は、含意された期待値への合致度という意味での適当さをスケールにとることができるかといったことを示している。「修飾の階層」は、最も程度副詞らしい「もっと」と重ねて使われたときの位置を示した。

		「ずっと」タイプ		「もっと」タイプ	「いっそう」タイプ	
被修飾の語句	相対的な状態性語句	○		○	○	
	動作性動詞	×	○	○	○	×
	他, 別 等	×	○	○	○	×
	数値	×	×	×	○	×
	文	×	×	×	○	×
基準にとるもの	空間や時間軸上の位置	空間や時間軸上の位置, 想定程度	現状, 当該事態の状態	Pと認定された程度	Pと認定された程度	
基本的な意味	XYのスケール上の位置差を表示	程度差によってXのP性を強調	スケール上をYからプラス方向に離脱	状態や事態の積み上げ(加算)	状態の増幅	
修飾の階層	内向き			外向き		
該当する程度副詞	「よほど」以外の「ずっと」グループ	「よほど」「よっぽど」	「もっと」グループ	「さらに」	「さらに」以外の「いっそう」グループ	

なお、これらの程度副詞が程度修飾として機能するためには二つの条件が必要である。一つは、被修飾語句として程度性を持つ語句が明示されているか、適当さのスケールまたは量的程度のス

ケールを設定できることである。そしてもう一つは、XとYが異なった状態を提示するものとして明確に認識させる「より」「～の方が」といった語句を持つことである(佐野1998)。特に、「ずっと」や「いっそう」グループの場合は、移動や程度・量の変動自体が修飾されることもあり、程度修飾かどうかの判断もゆれやすくなるためである。

考察の結果から、「XはYより〔程度副詞〕P」の構文に出現する程度副詞をスケールと基準への認定、基本的な意味の三点からまとめると以下のようになる。



aはスケールの種類、bは基準Yへの認定にスケールの設定が拘束されるか、cは「別」「歩いた」などの非段階語を修飾が可能か、dはXとYの関係を捉えるときのスケールの用い方を表す。

8. おわりに

以上の考察により、以下のことが明らかになった。

- 「もっと」「ずっと」「いっそう」の違いは、比較に用いるスケールの違いとして説明できる。「ずっと」…双方向性のあるスケールで、Pに関して相対的に $X > Y$ であることを表す。「もっと」…一方向性のスケールを用い、絶対基準において X Y ともにPであるとき、相対的に $X > Y$ を表す。基準への認定にスケールが拘束されない。「いっそう」…一方向性のスケールを用い、絶対基準において X Y ともにPであるとき、相対的に $X > Y$ を表す。基準への認定にスケールの設定が拘束され、変更不可能。
- 実際に比較を行う際には、スケールの種類よりも基準への認定が重要な意味をもつ。「ずっと」「よほど」を用いた比較では、比較基準YがXと程度差があると認識されねばならない。したがって、YがPの極大値に近づけば比較する必要性を失うためPの極小値や-Pの極大値になりがちである。「もっと」では、Pの程度の大きい方向が話し手の価値づけの高さを反映するため、基準Yはその認定に関わらず価値を低められる。それが「否定的用法」と説明される場合もあるが、これは基準となるYよりスケール上のプラス方向に異なるあり方を求める「もっと」の本質的な性質である。「いっそう」「さらに」は、認定された基準Yの状態Pを増

幅したり Y に P 性を追加するものである。増幅や追加の経過がスケールをなすため、Y が P であるとの認定なくしてはスケール自体が設定できない。

- 3) これらの副詞は事態の比較を行うが、程度が異なると認識した事態について程度の大小関係を表示するが程度の値は表示しない。したがって、これらの程度副詞を用いた比較結果の表示は一種の強調表現として機能する側面を持つ。

本稿の考察で用いたスケールの種類と基準の捉え方からの考察は、程度副詞のさまざまな共起制限や程度副詞の性質全般を考察するうえで有効な方法だと思われる。このような観点から他の現象についての合理的な説明を今後さらに試みたいと考えている。

注

- 1 渡辺1997にも「もっと」が「文末にモダリティ要素を伴ってモダリティ表現を形成し、ある属性の度合いについて〈-領域〉から〈+領域〉への度合いの高度化」(p79)を表す「モダリティ性」があるとされている。そのモダリティ要素が聞き手に対する要求や訴えかけであるため、属性Pに関して「現実の程度の度合いが話し手にとって不満で物足りなさを感じ、それを話し手の満足のいく度合いまで高めようとする心理が反映している」(p72)とする。また、大島1998は、話し手の主観を表し、「話し手の不足感」を表す用法と位置づける。
- 2 この歌詞の「もっと」「ずっと」は、歌手自身が出身地の広島方言に「替え歌」した際にはいずれも「エット(たくさん)」に置き換えられていた。そのため、この歌詞におけるこれらの語は量的程度を表す意味を持つとも考えられる(室山1976)。
- 3 渡辺1997では、「もっとずっとP」はあるが「ずっともっとP」がないことに注目して考察がなされている。「もっと」は属性の程度の度合いにおいて〈+領域〉から一段高い〈++領域〉への高度化を表す「累加性」があり、「ずっと」はこの累加性を積極的には表さないとした。
- 4 程度スケールは Bolinger 1972 の用語 (degree scale) を用いた。そのスケールをなす対極反意語とは、段階語 (Lyons 1977) で tall/short のような $x \sim y$ かつ $\sim y \neq x$ (' \sim ' は含意する、 \sim は否定) (八木1987, 49) を想定する。したがって、スケール上の P は positive (P) を、 $-P$ は negative (P) をそれぞれ表し、 $\text{Max. (neg. (P))} = \text{Min. (pos. (P))}$ の関係を持って両極をなす (Kennedy1999)。程度語 (degree words)、程度性を持つ語にはさまざまなタイプがあるが、それ自身がスケール上の値 (尺度を表すもの) になりうる語 (数量詞、量副詞、頻度を表す副詞など) は、語自身に意味として段階性を内在していないため、これらの副詞が修飾するものとは考えない。また、ある事態の程度性をはかるには、「 $0 \text{---neg. (P)---}\cdot\text{---pos. (P)---}\infty$ 」のようなスケール (Kennedy 2001, 53) を用いて、その程度性の値をスケール上の位置として示すことができる。しかし、事態の比較においてはスケール上のどの位置も P または $-P$ の程度のどこかの段階であり、 $-P$ と P の真ん中に「0」やどちらとも言えない領域があるとは考えない。
- 5 作例の場合に文として自然かどうかの判断は、20~40代の男女5名、うち日本語学専攻者3名(筆者含む)と日本語学非専攻者2名の内省によった。また、立命館大学文学部学生へのアンケート調査(有効回答数80)を行った。例文の許容度の判断には例文をそのまま提示して許容できるかを尋ねる文面回答に加え、一部口頭による質問も行った。「*」は5人全員または9割以上が許容できないと答えたもの、「??」は6割以上が許容できないと答えたものである。
- 6 「もっと」は「右」「前」などは、「赤/青/黄」のような色や味の関係と同様に、 $-P_1$ が P_2 にも P_3 、 P_4 にもなりうる欠性相関反意語 (Crues 1986) も修飾可能なため、こう記した。

- 7 毎日、産経、日経テレコン、中日の各紙面の「もっと」2036例中1766例を占める。
- 8 条件を提示した接続表現で後件が提示されないとき、基本的には後件に想定される事柄は文脈上話し手の期待と合致する方向の内容であるという価値の一方方向性が、赤塚1998で指摘されている。比較の場合同様に、「論より証拠」などでは基本的に総合評価で後項の方を適当とみなし、選択する操作が存在する。また、渡辺1986でも、「Xは(Yではなく)もっとAだ」のモデル構文で、Aには「マイナス評価を受けず、しばしば望ましいプラス評価を受ける」との記述がみられる。これらは「もっと」の指向するスケール上のプラス方向が話し手の考える望ましさや価値観と合致する方向であることを裏付けていると考えられる。
- 9 「もっとP」の「もっと」にプロミネンスがあれば程度の増大の提示が優先され、「P」にあれば望ましいあり方の方向が強調される傾向はあろう。後者の方が求められる状態を具体的に提示するため現状をより否定的に捉えている可能性もあるが、ここでは検討しない。
- 10 例文(6)(40)はアンケートを用いて、許容度を「ア.許容できる/イ.少し変な気もするが言えると思う/ウ.言える気もするが基本的には不自然/エ.不自然である」の4段階で調査した。その結果は次の通りであった。(於:立命館大学,回答数80)
(6)ア.7/イ.14/ウ.13/エ.46 (40)ア.41/イ.17/ウ.10/エ.12
- 11 「よほど」については、1144例中具体的な比較対象をもつものが15例と少なかった。
- 12 「ずっと」が「よほど」に修飾される「自分の前に立っているものとは自分はよほどずっと以前のある時期一無限にとさえ言っていっくらい遥かな過去のあるとき一から知り合っているのだという信念を……」(黒猫)のような例も一例あった。同様に考えてよいと思われる。

参考文献

- 赤塚 紀子・坪本 篤朗 (1998) 『モダリティと発話行為』 研究社
- 石神 照雄 (1980) 「比較の構文構造—(程度性)の原理—」 『文芸研究』 93.41-49.信州大学
- 大島 潤子 (1998) 「日本語と中国語の比較を表す程度副詞をめぐって『もっと』と“更”」 『国文目白』 37.24-32.日本女子大学
- 奥村 大志 (1995) 『『もっと』についての考察』 『日本語教育』 87.91-102
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」 渡辺実編 『副用語の研究』 176-198.明治書院
- 佐野 由紀子 (1998) 「比較に関わる程度副詞」 『国語学』 195.99-112.
- 丹保 健一 (1975) 『『程度副詞』+『動詞』の意味構造—『もっと』+『動詞』を中心に—』 『国語研究』 14.62-69
- 室山 敏昭 (1976) 『方言副詞語彙の基礎的研究』 たたら書房
- 森山 卓郎 (1985) 「程度副詞と動詞句」 『国文学会誌』 20.60-65.京都教育大学
- 八木 孝夫 (1987) 『程度表現と比較構造』 大修館
- 渡辺 実 (1986) 「比較の副詞—『もっと』を中心に—」 『学習院大学言語共同研究所紀要』 8.65-74
- 渡辺 実 (1987) 「比較副詞『よほど』について—副用語の意義・用法の記述の試み(二)—」 『国文学科紀要』 23.39-52.上智大学
- 渡辺 史央 (1997) 『『もっとずっとZ』をめぐって—比較性としての意味機能の観点から—』 『日本語・日本文化』 23.67-83.大阪外国語大学
- Bolinger, Dwight (1972) Degree Words. Mouton major series. Mouton & co.
- Crues, D. A. (1986) Lexical Semantics. Cambridge Univ. Press.
- Kennedy, Christophor (1999) Gradable adjectives denote measure functions, not patial functions.

- Studies in The Linguistic Sciences (29) 1.65-80
Kennedy, Christophor (2001) Polar opposition and the ontology of 'degrees'. *Liugistics and Philosophy* 24 (1).71-124
Lyons, John (1977) *Semantics I*. Cambridge Univ. Press.

用例出典

用例データは「新潮文庫の100冊 (CD-ROM版) (NEC), 朝日新聞「天声人語1985年～1991年」のコンパクトディスク (日外アソシエーツ), 毎日新聞, 産経新聞, 中日新聞, 日経テレコンの電子処理版紙面98年前期分, 『shall……』『キッチン』は北村雅則氏が電子資料化したものを使用し, 該当語句を検索 (Qgrep) して採取した。『アポロ』は手作業で拾い出した。そのうち論述に必要なものをピックアップして引用した。実際に引用した用例の出典名は以下の通りである。

(天声人語) 『朝日新聞』, (中日) 『中日新聞』, (毎日) 『毎日新聞』 (産経) 『産経新聞』, 『孤高の人』新田次郎, 『華麗なるギャツビー』フィッツジェラルド, (shall we) 『shall we ダンス?』周防正行, 『キッチン』吉本ばなな, 「アポロ」 (ポルノグラフィティのCD歌詞カード)

(投稿受理日: 2001年7月13日)

(改稿受理日: 2002年5月15日)

川端 元子 (かわばた もとこ)

名古屋大学文学研究科博士課程後期

532-0894 滋賀県近江八幡市中村町7-6

Tel. 0748-33-9143 e-mail:acy2@bronze.ocn.ne.jp

The functional characteristics of adverbs of degree in comparative sentences:

Using differences in scale to examine the degree of
differences between two objects

KAWABATA Motoko

Graduate student, Nagoya University

Keywords

"motto", *"zutto"*, *"issoo"*, comparison criterion, degree scale

Abstract

"Motto", *"zutto"* and *"issoo"*, adverbs of degree, are usually found in comparative sentences. These adverbs suggest that X is greater in degree in some aspect than Y. This study examines the functional characteristics of such adverbs as used by mainly newspapers and "Shincho-bunko no 100satsu" (CD-ROM of 100 books), and restrictions on their usage by two methods. One is the difference in scale used to examine the degree between two things, and the other is the root of meanings. The functional characteristics of these adverbs are as follows:

- 1) The group using a bipolar scale (negativeP \leftrightarrow ositiveP): *"zutto"*-group (*"yohodo"*, *"harukani"*). In this group, *"X wa Y yori [adv.] P da"*, shows that X is more P than Y and in comparison there is a great difference between the subjects X and Y. The difference is based on the duration and distance in doing something.
- 2) The group using a single pole scale (min.P \leftrightarrow ax.P): *"motto"*-group (*"issoo"*, *"sarani"*). In this group, *"X wa Y yori [adv.] P da"* shows that X is in a position above Y when they are examined on the same scale, P. This group consists of two types. One is the *"motto"*-type and the other is the *"issoo"*-type. The former shows that as P, X (a position above Y on the scale) is better than Y and contains an insufficient element in its root. This means that we choose X, not Y. However, we use the latter to confirm that the grade of Y is sufficient, but that X is preferable.